岐阜市未来共創ワークショップ

活動報告書

はじめに

岐阜市では、2040 年頃を見据えたまちづくりの総合的な方針として「岐阜市未来のまちづくり構想」を 2022 年 2 月に策定しました。本構想は 5 年ごとの見直しを予定しており、2025 年度から 2 年間をかけて改定作業を行っています。

改定に向けた市民参画の取組みの一環として、市民ワークショップを開催しました。多様な世代・職業の参加者が集い、フューチャーデザインの考え方を用いて岐阜市の未来像を描きながら、持続可能で魅力あるまちづくりの方向性を探りました。

この活動報告書では、参加者が描いた岐阜市の未来像をお届けします。皆さまにとって、岐阜市が目指すべき方向性について、ともに考え、行動するきっかけとなれば幸いです。

岐阜市未来のまちづくり構想に関する
岐阜市ホームページ
（ページ番号 1004125）
https://www.city.gifu.lg.jp/info
/seisaku/1004125/index.html

フューチャーデザインとは

様々な課題に対し、現役世代だけではなく、その課題が及ぶ将来世代の立場も踏まえて、持続可能な社会システムを引き継ぐための仕組みをデザインする手法

開催概要

開催の目的

市民の皆様の視点により、岐阜市の現状や課題を把握するとともに、2040 年頃の岐阜市が目指す姿とその実現方法について意見を交換しながら、「共に行動する未来を考えること」を目的としています。

開催スケジュール（全 3 回）

第 1 回：2025 年 11 月 19 日（水）　午後 6 時～午後 8 時
第 2 回：2025 年 12 月 17 日（水）　午後 6 時～午後 8 時 30 分
第 3 回：2026 年 1 月 21 日（水）　午後 6 時～午後 8 時 30 分

開催場所

岐阜市庁舎 6 階 6-1 大会議室

ファシリテーター

出村　嘉史　氏（岐阜大学　社会システム経営学環　教授）

経歴：
2024 年度　TU Delft（オランダ）客員研究員
2021 年度　～現職
2016 年度　～美殿町ラボ
2009 年度　～岐阜大学　工学部准教授
2008 年度　～京都大学　大学院工学研究科助教
2007 年度　University of Sheffield（英国）客員研究員
2004 年度　～京都大学　工学研究科助手

専門：都市形成史・都市経営・景観デザイン

対象者

市内在住・在勤・在学、又は岐阜市にゆかりのある中学生以上の方並びに岐阜市のまちづくりに積極的に携わっている方

参加人数

第 1 回：44 名
第 2 回：45 名
第 3 回：43 名

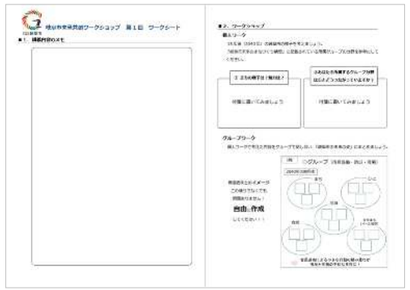
グループ編成（分野別）

A 班・B 班	教育・子育て
C 班・D 班	健康・福祉・医療
E 班・F 班	市民協働・防災・環境
G 班・H 班	産業・労働・交流
I 班・J 班	都市基盤整備・交通・中心市街地活性化

ワークショップの内容

第 1 回　未来（2040 年頃）の視点から岐阜市の姿を描く

岐阜市未来のまちづくり構想やまちづくりに関するインプット講義を行いました。その後、グループワークにおいて、2010 年当時の自分を振り返ることで時代の変化を意識しつつ、2040 年の岐阜市の姿を自由にイメージし、意見交換を通じて「2040 年の岐阜市の未来像」をグループごとにまとめました。



第 2 回　未来（2040 年頃）の視点から現在を振り返る

未来新聞の作成に向けて、第 1 回で話し合った「2040 年の岐阜市の未来像」について、その実現のために必要な要素、未来の姿と現状とのギャップ及び必要なアクションを考えました。未来から現在への道筋を考えてグループごとにまとめ、発表しました。

第 3 回：未来（2040 年頃）の視点から現在を振り返る

前回までの議論を踏まえ、各グループで未来新聞の作成に取り組みました。前回作成したワークシートを基に、生成 AI で作成した（※）未来新聞の素案を参加者の皆さんが修正・加筆し、2040 年の岐阜市の姿を新聞形式で具体的に表現しました。最後にすべてのグループが発表を行い、様々な視点から描かれた 2040 年の岐阜市の姿を共有しました。

※本ワークショップにおける生成 AI 活用について

本ワークショップでは、皆様の豊かなアイデアを形にするプロセスを最適化し、より創造的な議論に時間を充てるため、生成 AI を活用して未来新聞の原案を作成しました。なお、AI はあくまでサポートツールとし、文章及び画像は必ず人の目で確認のうえ、最終判断は参加者が行いました。

未来新聞＆講評

全体講評

短い時間の中で、各グループに素晴らしいプレゼンテーションを行っていただきました。全てのビジョンが既に達成された未来として語られており、非常に感動的でした。10 グループがそれぞれ独自の未来を描き、それを過去形で語ることでその道のりまでも想像させてくれる表現が印象的でした。

これらの未来新聞は広く共有しても恥ずかしくない質の高いものです。皆さんで読み合い「こんな発想もあるのか」と気づきを得ることで、考え方も変わってくるのではないでしょうか。楽しみながら創造的な活動をすることが、実は未来を切り拓くことにつながると思います。

新聞記事という形式を選ぶことで、どのような社会が実現しているかを具体的に考える機会になったと思います。議論では、現在との比較だけでなく、その社会がどのように成り立っているのかという構造を紐解くような深い考察がなされていた点が特に素晴らしかったと思います。

次ページからは、ワークショップで各グループが新聞形式で発表した 2040 年の岐阜市の姿を、ファシリテーターによる講評とともにご紹介します。

発行日：2040年1月21日　岐阜未来新聞　岐阜市未来共創WS：Aグループ

全世代がわくわくできる！つながる！安心できる！岐阜市

地域リーダー図鑑が生んだ「会いに行きたいリーダー」

48 「岐阜バスの達人」
鵜飼　好男
【種別】交通案内系リーダー
【特徴】全路線の時刻表を完全記憶
【レア度】★★★★★

（「岐阜市地域リーダー図鑑」より）

2026年にスタートした「地域リーダー図鑑プロジェクト」が、想像を超える成果を生み出している。現在、岐阜市全46校区で320人のリーダーが登録され、年間延べ1万8千件の「訪問交流」が実現。この取り組みが移住促進にも大きく貢献し、過去5年間の移住者数は従来の3.2倍に達した。「リーダー図鑑に載りたくて移住してきました！」と話すのは、東京から移住した山田さん一家。父親の健太さん（38）は既に校区リーダーとして子どもたちのプログラミング教室を主宰し、地域通貨で年間12万ぎふコイン（約6万円相当）を獲得している。特に人気の高い48番・岐阜バスの路線や時刻を脳裏に焼き付けている「岐阜バスの達人」こと鵜飼さん（72）には「レアキャラ鵜飼さんに会いたい！」と県外からの訪問者が絶えない。各リーダーの得意分野は料理から工作、歴史案内まで多岐にわたり、「生きた図鑑」として機能している。

岐阜市未来新聞
号外

（編集者）
あんな　つな
のりくん　はるちゃん
ほりえちゃん
やまちゃん　後藤

（発行日）
2040年（令和22年）
1月21日

よりみちカフェがつなぐ地域の絆
地域通貨「ぎふコイン」×古民家リノベーションで実現した新しいコミュニティ

岐阜市が2025年から推進してきた「よりみちカフェプロジェクト」が15年目を迎え、市民の85%が地域活動に参加する全国屈指の成果を達成した。「よりみちカフェ」は古民家をリノベーションした「持ち寄り喫茶店」で、現在市内127か所で運営中。最大の特徴は地域通貨「ぎふコイン」の活用だ。住民は野菜や手作り品を持参するとぎふコインがもらえ、そのコインでコーヒーや他の人の持ち寄り品を購入できる。商店街での買い物にも使用でき、地域内でお金が循環する仕組みとなっている。築80年の古民家を改装した「ながもり庵」（長森地区）では毎週火曜日、0歳から90歳まで幅広い世代が「みんなでごはん」に集う。「最初は野菜を売りに来ただけだったのに、気づいたら地域の相談役になっていた」と話すのは田中美智子さん（67）。カフェの運営費は地元企業17社の協賛で7割を負担し、残り3割を住民が地域通貨と労力で補う仕組みが定着した。利用者は延べ4万2千人に達し、参加者の9割が「地域とのつながりを実感し、安心感を感じた」と回答している。この「気づいたら参加していた」という自然な関わり方が高い継続率を支え、日常の延長線上で生まれるつながりが持続可能な地域コミュニティを実現している。

（よりみちカフェの様子）

はじめの一歩文化醸成

地域住民との関わり方に不安のある市民をサポートする「はじめの一歩応援文化」が岐阜市全域で活発に。2028年策定の「かかわり方ガイドライン」により、トラブル発生時の責任の所在や地元コミュニティへの参加方法が明確化され、新規参加者数は年間2800人に達した。「好きなことから、できる範囲で、みんなと一緒に」の理念で子どもの見守り活動参加者数は4.2倍に増加。「若者が周りに集まってきてうれしい」と語る高齢者も多く、世代を超えたふれあいが実現している。

「ぎふチャット」活用によるまつりの復活

「雑談から何かが生まれる」をコンセプトに開発された地域AI「ぎふちゃっと」の活用をきっかけに、「則武秋まつり」が20年ぶりに復活した。よりみちカフェでの多世代のおしゃべりからAIが会話内容を分析し、人がつながるイベントをいくつか提案。そのうち、特に要望が多く集まった、秋まつりの復活が今回実現した。

基本的に人の個性を一つ一つ尊重しながら、それによって未来を作っていくという社会の姿が素晴らしいと思いました。

岐阜市未来共創WS：Bグループ

これまでの取組みの成果の集大成 !!

日刊 未来タイムズ

岐阜市 子育てするため戻って来る人が日本一!!!

次週刊行される日経グローカル2月号で、岐阜市が全国の自治体を対象とした「子育てするために戻りたいまちランキング」で1位を獲得することが21日、当社の調べで明らかになった。同市の子育て関連施策が全国の子育て世代から高い評価を得た結果とみられ、人口減少が進む中でも20代、30代と10歳未満の世代で人口動態がプラスに転じている。岐阜市の具体的な施策については、同誌で詳しく紹介される予定だ。

岐阜市未来新聞
2040.1.21
号外

編集者
花　子、ことさん、ゆかり、みつはし、けんじ、うっちー、小　熊

学びの場を創出!!「岐阜市未来アカデミー」

岐阜市の「未来アカデミー」構想では、市内全校で地域資源を活用した教育プログラムが推進されており、平日の授業のみならず、放課後や休日、また長期休業中などの活動に役立っている。和傘や岐阜ちょうちんなどの伝統工芸について学びを深めたり、プログラミング実践や、起業体験など、従来の座学中心の教育から大きくシフトし、実践的な学びが展開されている。子供たちは「和傘づくりやゲーム開発、これらを販促できる起業に挑戦したい」と意欲的に参加し、地域の職人や専門家との交流を楽しんでいる。タブレット端末を使ったデジタル制作と伝統技術の融合が創造的な作品につながり、一中学生と共に新技術を学び、孫との会話が増えた」（70代・男性）との声も聞かれる。

また、市内で6校の小中一貫の義務教育学校が開学し、9年間の継続的な探究学習が実施されている。保護者からは「子供が楽しんで通っている」といった安心の声が寄せられ、市外からの移住希望者も増加。岐阜市は教育ブランドの確立を進め、「子育てのために戻る人が日本一」の目標の達成した。

多世代が交流するアカデミーでの学習風景

大人から子供まで交流、「柳ケ瀬ごちゃまぜプログラム」

岐阜市の柳ケ瀬商店街では、世代間交流の「柳ケ瀬ごちゃまぜプログラム」が市民に親しまれている。

商店街の空き店舗や公共空間を活用し、大人と子供が入り混じった多世代イベントを定期開催。地域NPO法人や商店街団体との連携により、創業・起業への機運も高まっている。市民参加の機会不足が課題だった市では、行政のサポート制度のもと、柳ケ瀬全体での体系的支援体制を構築。

月数回開催される多世代ワークショップや、老舗店主の知識を若い世代に継承する「柳ケ瀬知恵のごちゃまぜプロジェクト」、「ごちゃまぜカフェ」運営などを通じ年齢を超えた学び合いとふれあいの場を日常的に提供している。

「子供と大人がごちゃまぜで楽しめる柳ケ瀬に感謝」（30代・母親）といった声も上がり、大人も子供もともに自発的に参加する環境づくりが商店街全体に着実に根付いている。今後は市域全体にこの取組みを広めていく考えだという。

イベント開催に向けたワークショップの様子

安心できる子育て環境「ひなたプロジェクトセンター」設立!!

岐阜市の子育て支援体制が大きく前進している。「ひなたプロジェクトセンター」では、子育て関連の情報発信や相談窓口の整備を核とした包括的なサポート体制を構築。公民館機能、児童館、保育所、生涯学習講座、コワーキングスペースを兼ね備えたリスキリングの拠点として、地域のニーズに応えている。

これまで支援体制の整備不足のため、若い世代の移住が進まなかった同市が年前から、移住者や子育て世代が安心して生活できる環境整備に本格的に取り組み始め、現在、市内5か所で運営されており、親子で参加できるイベントの充実が図られているほか、地域での子育てサポーターの育成にも力を入れている。

育児経験豊富な地域住民を対象とした研修プログラムを実施し、専門的な知識やスキルを身につけた地域サポーターを育成する仕組みを構築。また、交通の利便性の欠如という課題に対応するため、アクセスが困難な家族向けの送迎サービスや、オンラインでの相談対応も充実させている。利用者からは「岐阜市は最高の子育て環境です！」（20代・父親）との高い評価が寄せられ、暮らしの環境を重視した取り組みの成果が着実に顕現している。この取り組みが、2040年の目標達成に大きく貢献していることは言うまでもない。

施設内の育児スペース（このほか、保育所やコンシェルジュ常駐の相談窓口など子育て支援機能を併設）

子育てを機に皆さんが戻ってくるという点が印象的です。外からも中からも人が集まり、育ち合える場所を作る。とても素晴らしい願いが実現された 15 年後の姿だと思います。

岐阜市未来共創WS：Cグループ

岐阜市の「いま」をどこよりも早くお届け！

編集者：廣瀬、沖本、森、鈴木、山田

NEWSLETTER

2040 1 号外速報

岐阜市で実現！「車が無くても、豊かに楽しく暮らせるまち」

かねてから市民が待ち望んでいた「車が無くても、豊かに楽しく暮らせるまち」がついに実現！
今回は「車が無くても、豊かに楽しく暮らせるまち」の一部を皆さんにご紹介します。

Topic 01 医療・介護・福祉まるっと連携、在宅生活を支える基盤が完成

岐阜市が2025年から本格稼働させた**「医療・介護・福祉まるっと連携プラットフォーム」**。同プラットフォームは、市内327の医療機関と154の介護事業所、89の福祉施設をICTで結び、リアルタイムで利用者の情報を共有。通院困難者向けの送迎サービスは年間延べ8,200回利用され、受診控えは15年前の3分の1まで減少した。
「かかりつけ医とヘルパーさんが連携してくれて安心！」と語る田中さん（82）。昨年の軽い脳梗塞後も、医師とケアマネジャーが連携し在宅復帰を果たした。

ケアマネジャー 柴田勇斗さん

今までは、サービス利用者がそれぞれの施設に自身の情報を伝えなければならず、利用者は負担感を感じていました。しかし今では、医療機関や福祉事業所がリアルタイムで情報共有し、必要時に送迎してもらえるようになったため、利用者はどこの施設もスムーズに利用できるようになり、とても暮らしやすくなったと感じます。

Topic 02 福業プロジェクトで「好きな時に働く」が実現

岐阜市の**「福業プロジェクト」**が、柔軟な働き方の新たなモデルとして全国から注目を集めている。医療・介護・福祉分野を中心とした人材交流制度は、登録者数3,400人を突破し、年間12,000件のマッチングが成立し、副業による収入は平均月額4.2万円となり、同時に多業種で人手不足が解消している。

Topic 03 自動運転×デジタル健康管理 医療格差ゼロへ

「スマホで健康管理、自動運転で病院へ！」をコンセプトに掲げる岐阜市のデジタルヘルスケア・モビリティサービス。自身のスマートフォンでオンライン診療や薬の処方を受けられるほか、受診の際は自動運転車両による医療送迎サービスを利用できる。市内12コースで運行し、年間利用者数は延べ28,000人。デジタル機器を活用した健康管理システムの登録者は65歳以上で78%に達した。

Topic 04 岐阜の菓子まき、全国ブランドで観光客年間100万人

岐阜市の伝統文化「菓子まき」を全国ブランドに押し上げた**「ぎふ菓子まき日本一プロジェクト」**が大成功を収めている。年間開催数は180回を突破し、「イベントの締めは菓子まき！」と、菓子まき目当ての観光客は年間100万人に達した。
「菓子まきで岐阜が全国的に有名になった！」と地元商店主の西田さん（58）は誇らしげに語る。まかれる菓子には、**地域クーポン**が同封されており、岐阜でお金がまわる仕組みが生まれ、地元銘菓の売上は5年前の3.2倍に増加し、大手菓子メーカーの工場が多数誘致されている。また、菓子まきコミュニティのSNSフォロワーは12万人を突破。岐阜の新しい文化として全国から注目を集めている。
さらに、このプロジェクトは岐阜市内の空き家・空き地を活用した交流拠点**「みんなの居場所」**で生まれたことも興味深い。
「みんなの居場所」は、多世代の新たな居場所として、特技・趣味を生かした新たなマッチングサービスに約8,700人が登録し、市内の各所で大小さまざまなつながりとうねりを生み出している。市まちづくり推進課によると、公式オフ会参加者の94%が「新しい友人ができた」と回答している。

技術でできることは技術で解決し、マッチングなどを通じて人と人を繋げていく発想が素晴らしいです。菓子巻きを一つの産業として仕立て上げるという構想が印象的でした。

岐阜市未来共創WS：Dグループ

GIFU FUTURE NEWS

2040 November 21

市民ワークショップから生まれた奇跡　全国注目の『ぎふモデル』

2025年、市民ワークショップから始まった壮大な挑戦がついに実現を迎えた。岐阜市が掲げた【生涯現役・ピンピンコロリが実現できるまち構想】は、15年の歳月を経て、超高齢社会における理想的な都市モデルとして結実している。現在、全国から年間150件を超える視察が岐阜市を訪れ、『ぎふモデル』の導入検討が進んでいる。人口減少社会における持続可能なまちづくりの答えがここにある。

Topic 01 スマホ一つで健康管理　市民の８割が利用するアプリ

岐阜市が段階的に導入してきた、健康・福祉・医療サービス統合アプリ『ぎふ健康ナビ』の利用者が、ついに市民の8割を突破した。かつては分散していた各種サービスがアプリで完結し、予防医療と連動したポイント制度により、市民の健康寿命は全国平均を2.3歳上回る結果となっている。
「スマホ１つで全て解決」と話すのはＴさん（70歳・女性）。かかりつけ医との連携も密になり、家族と健康状態を共有できるため安心感が大きいという。

Topic 02 免許返納者の外出頻度2倍

岐阜市の新交通システムが、高齢者の移動課題を劇的に解決している。自動運転バス12路線に加え、ルートから離れた地域も無人タクシー15台が運行し、高齢者は割引運賃で気軽に利用できる。自動運転バスは、画期的な「ルート沿い自由乗降システム」により、バス停以外の安全な場所でも乗降可能だ。
「免許を返納しても行動範囲が広がった」と語るYさん（62歳・女性）。外出頻度は2倍に増加し、新たに絵画教室に通い始めた。

Topic 03 シニア就業率全国１位

岐阜市の前期高齢者の就業率が42.3％で3年連続全国1位となった。マッチングアプリ『匠match』により、趣味や経験を活かして地元企業と１日単位で働くスタイルが定着している。
「趣味の料理を活かして、若者の運営する店で仕込みをサポートしています。自分のペースで働けるので無理なく働けます」とＳさん（73歳・男性）。週3日勤務をしながら地域ボランティアにも参加している。

Topic 04 柳ケ瀬再生完了　３世代交流の聖地に

かつて、シャッター街となっていた岐阜市の柳ケ瀬商店街が、多世代交流の拠点として見事な復活を遂げている。2038年にオープンした複合交流施設『みんなの柳ケ瀬』は年間利用者数が50万人を突破した。成功の要因は、子どもから高齢者までどの世代でも楽しめる施設となっている点だ。また、空き店舗を活用した『チャレンジショップ』制度では、シニアが講師を務める伝統工芸の体験型クラフト教室や、若者が運営する週替わりのシェアキッチン＆バーなどが人気を集める。
「孫と一緒に毎週通うのが楽しみ」と話すのは、市内在住のＧさん（68歳・女性）。施設内の図書コーナーで孫に読み聞かせをした後、チャレンジショップで若者の新しい感性に触れながら、岐阜の昔話を語り聞かせるのが定番だ。

編集者：浅野、志田、長屋、清水、やまピー、三輪

素晴らしい未来像です。どのような取り組みをすれば、この未来が得られるのか、具体的に見えてきた気がします。

編集者：野尻、藤本、渡邊、松下、林、藤井、江崎、玉木

岐阜市未来共創WS：Eグループ

2040 JULY 12

GIFUCITY TIMES

2040.7.12(Thu) Gifu Weather
晴れ 時々 曇り
最高30℃ / 最低20℃
長良川：遊泳OK
ドローン配送：飛行良好

私たちが創った未来 全世代で育む緑豊かなまち

15年前、市民ワークショップで描かれた「どんなフェーズでも人と自然がつながる持続可能なまち」という未来像は、今や私たちの日常となった。笑顔があふれる多世代の交流、都市機能と融合した豊かな緑、災害に強く絆の深い地域社会。これらは単なる理想ではなく、市民一人ひとりの行動が結実した成果だ。「つながり」「自然」「防災」「長良川」という4つの柱を軸に進められた変革は、いかにしてこのまちを変えたのか…。その成功の軌跡を追う。

Action01 笑顔と活気が戻った地域社会

かつて希薄化が懸念された地域のつながりは、劇的な回復を遂げた。「つながり再生プロジェクト」では、多世代交流イベントの定期開催により地域夏祭りなどが復活。小学校区単位の「いきいきサロン」は、年代に関係なく高齢者から子どもまでが集う拠点となった。実行委員会方式の導入で、やらされるのではなく「やりたい人が主体」の運営が定着。「小学生と高校生と一緒にイベント企画するの楽しい！」と実行委員の中学2年生佐藤健太さん（14）が話すように、自発的な熱意が地域の質を高めている。

Action02 都市と森が呼吸する空間へ

岐阜市の中心部は、「まちなか自然空間創出プロジェクト」により緑溢れる空間へと変貌し、岐阜駅周辺や柳ケ瀬に若者の居場所が誕生。木質化建築が進み、温かみのある景観が広がっている。大学生の田中由衣さん（21）は、「ここは本当に気持ちがよくて、新しい居場所になった！みんなで集まって、ゆっくりおしゃべりしたりするのが最高！」と笑顔を見せる。
自然体験入口拠点の設置により、都市と自然の融合が実現し市民が日常的に自然と触れ合う機会が定着している。

Action03 絆が守る命と未来

「災害関連死ゼロ」を達成した「地域愛着・防災力向上プロジェクト」。その成功の裏には、「防災の話をしない防災改革」という逆転の発想があった。着手したのは訓練ではなく、徹底した「住み心地」の向上だ。児童館の増設や多世代交流拠点の整備などを通じ、住民に「このまちが好き」という愛着を育むことに力を注いだ。「愛着が、自然と『地域を守りたい』という意識へ変わるんです」。そう語る地域防災リーダーの鈴木博さん（68）は、かつて災害で家族を失った。その経験から日常の声かけによる見守りの輪を広げ、強固な防災網を構築。「日常のおせっかいが、命を救う最強のライフライン」と笑顔で結んだ。

Action04 清流と暮らしが溶け合う

長良川は「使う」空間へと進化した。未来洞察研究所の全国民意識調査で「住みたいまちランキング」で岐阜市は一位を獲得。「長良川魅力プロモーションプロジェクト」で水辺空間の活用が進み、ウォーキング・サイクリングコースは市民の健康増進の場として定着。親水公園や展望デッキなどの親水空間も整備され、四季折々のイベントも盛況だ。「川遊びイベントで魚とりが上手になった！」と笑顔を見せる小学4年生高橋陽人くん（10）のように、子どもたちが自然と触れ合える環境は、次世代への重要な教育の場となっている。

環境との調和が素晴らしいですね。森と共存しながらも、しっかりと社会が実を結んでいる様子がよく伝わってきました。

発行日：2040年4月5日

岐阜市未来共創WS：Fグループ

岐阜市未来新聞

編集者：平田、薮下ひろし、大町、河合、児玉、野田

人がつながり、まちの主役がイキイキ生活できる安心安全のまちづくりが加速！

旧自治組織の変革！新たな地域の担い手として「まちづくりラボ」が大活躍！

岐阜市内で従来の町内会組織の解散が相次ぐ中、新たな地域コミュニティ「まちづくりラボ」が注目を集めている。同組織は15年前、高齢化で変革が必要になった自治会から発展。世帯単位の強制加入ではなく、性別・年齢を問わず、地域に関心のある人なら誰でも参加できる画期的なシステムを導入した。
現在は空き家を活用したシェアオフィス運営、地元野菜の直売所経営などのコミュニティビジネスを展開。防災訓練や子育てサロン、高齢者見守り活動も活発だ。「子育ての相談ができて心強い」（30代女性）、「定年後も地域で役立てて生きがいになる」（60代男性）など市民からは好評の声が上がる。
市は「新しい地域共助の模範例。持続可能な仕組みが構築されている」として、他地区への普及を本格検討している。

ふるさとの宝発見！若者が主役のまちづくり大成功！

岐阜市内で若者が中心となったまちづくり活動が大きな成果を上げている。「ふるさと宝探しプロジェクト」では、20～30代の若者が地域の隠れた魅力を発掘。古民家を改修したカフェ運営、伝統工芸品のオンライン販売、空き家を活用したコワーキングスペースなど多彩なコミュニティビジネスを展開している。
特に注目されるのが世代間の「知の伝承」活動だ。地元高齢者から昔の生活の知恵や伝統技術を学ぶ「地域の歴史や文化塾」では、郷土料理、農作業のコツなどを若者が継承。これらを活かした商品開発や体験プログラムが人気を呼んでいる。
「おばあちゃんの漬物レシピで起業できた」（20代女性）、「若い人に技術を教えられて生きがいになる」（80代男性）など、世代を超えた絆が深まっている。
市の調査では、若者の地元定着率が5年前の1.3倍に向上。高齢者の知恵と若者のエネルギーが融合した「新しいふるさと愛」が根付いている。

災害対応力向上と地域コミュニティ強化を両立

岐阜市内で「まちづくりラボ」を中心とした地域コミュニティが大きな成果を上げ、その評判を聞きつけた転入者が急増している。
2025年に「まちづくりラボ」のアイデアを元に市が導入したデジタル地域情報共有ツール「つながりネット岐阜」を活用し、防犯情報の即座共有や災害時の安否確認システムを構築。まちづくりラボと行政の連携により、地域の安全安心体制が大幅に強化された。
注目は性別・年齢・出身地を問わないオープンなコミュニティ運営だ。多世代ふれあいサロンでは、高齢者向け健康講座から子育て相談、移住者歓迎会まで多彩な活動を展開。月間利用者は500人を超える。
「関東から移住したが、イメージ以上に住みやすい」（30代男性）、「デジタルツールで近所の様子がわかり安心」（70代女性）、「性別関係なく活動に参加でき居心地が良い」（40代ノンバイナリー）など好評だ。昨年の転入者数は5万人になった。

10年で50万人という数字は非常に印象的です。自治会の変革を一つの歴史として捉え、そこから新たに積み上げていく姿を物語として描かれた点が素晴らしいと思います。

岐阜未来新聞　2040年（令和22年）0月00日（某曜日）　2

岐阜市、全国初 仕事で夢追う人を「特別公務員」任用へ

行政資産で起業支援、定住図る

【岐阜】岐阜市は、特定の夢や目標を持つ人材を「特別公務員」として任用し、その自己実現を市が全面的に支援する全国初の新制度を導入すると発表した。公務員の安定した身分を保証しつつ、市の資産を個人の活動に開放。行政課題の解決に外部の知見を取り入れるとともに、任期後の起業や定住に繋げる。新制度の最大の特徴は、市が「スポンサー」として人材を支える仕組みだ。採用者には安定した給与と活動支援金を支給。さらに市内の空き店舗や公共施設をオフィスやアトリエとして無償提供するほか、市公式SNSでの発信支援や地元経済界とのマッチングも市が仲介し、事業の軌道投入を強力に後押し。具体的な支援対象として、市は観光や一次産業の担い手不足解消も見据える。例えば、1300年以上の歴史を誇る「ぎふ長良川の鵜飼」を支える観覧船の船頭職を志望する若者に対し、技術習得期間中、オフシーズンの生活を特別公務員として支援。また、ぎふベジ生産を目指す新規就農者に、市内の耕作放棄地を優先的に紹介するほか、最新の農業機械の借入費用を支援金で賄う。これら現場のニーズと個人の夢を合致させることで、技術継承と生産性向上を同時に図る狙いだ。市側の狙いは、単なる労働力確保に留まらない。採用者が持つ専門スキルや瑞々しい感性を公務に融合させる「官民共創」により、組織の活性化と行政サービスの質向上を図る。任期中から地域に深く根付く環境を整えることで、任期終了後も市内での起業や活動継続を促し、新たな産業創出と若年層の定住人口増加を同時に実現する戦略だ。市長は会見で「岐阜市を自分の夢を叶えるための『踏み台』にしてほしい」と強調。深刻な若者流出が続く中、個人の夢を街の活力へと変換する投資型支援で、地方創生の新たな定住モデル確立を目指す。来年度から全国を対象に、幅広い分野で募集を開始する方針だ。

岐阜学で進む次世代育成

岐阜市の未来を支える人材育成の軸となったのが、小中学校に正式導入された「岐阜学」だ。郷土・産業・歴史・自然を横断的に学ぶこの科目は、教科書だけでなく地域そのものを教材とする学びとして発展してきた。高校では「多様な働き方体験授業」が実施され、生徒たちは地元企業やフリーランサーと協働しながら、仕事と暮らしのリアルに触れている。こうした学びを通じて、若者が地域課題を自分事として考える力を身につけていった。その成果として、地元就職や起業、Uターンを選ぶ若者は年々増加。2040年には市内高校卒業生の約6割が、卒業後も何らかの形で岐阜市と関わり続けている。子どもたちが自然に「岐阜の未来」を語る姿は、この教育の確かな成果を物語っている。

『理念で働く時代
～岐阜市スタイルが教えてくれたこと～』

1　2040年（令和22年）0月00日（某曜日）　岐阜未来新聞　第00000号　岐阜市未来共創WS：Gグループ

岐阜市に根付くマルチワーク文化

地域価値を重視した岐阜経済圏の形成

岐阜市独自の価値観に基づく「岐阜経済圏」が確立されつつある。地域文化と結びついた多様な働き方（マルチワーク）が定着し、産業と暮らしが有機的に循環するコミュニティが形成され、地元の若い世代の活力を引き出している。

「岐阜経済圏」とは、利益や効率だけでなく、シビックプライドを大切にし、岐阜の文化や暮らし、風土に根ざした仕事や、岐阜で働く人々、地域共同体が作り出す『場』を重視する価値基準による圏域を指す。「岐阜経済圏」確立の背景には、市内で進む、複数の仕事や役割を担う人材（Local Multi Workers）が、地域産業の現場を行き来しながら関わりを深めている現状がある。「岐阜経済圏」では、せんい産業・農業・建築業が連携した衣食住循環システムにより、生産・消費・再活用が地域内で完結。地域の個人商店を支える志向など、価格だけでなく背景や理念で選ぶ消費が日常となった。20代の起業家は「岐阜市では自分の価値観に合った働き方ができる」と語る。若者の定住希望者が増え、「岐阜で家を持つ」ことが理想の暮らし方として支持されている。市はスキマ時間の仕事マッチングと学び直し拠点を各地区に整備し、多くの市民がマルチワークと学びを両立させている。伝統的なモーニング文化や飲み屋街も〝食の回遊〟として地域文化の一部として再評価され、訪れる人々に岐阜らしい体験を提供している。50代の商店主は「顔の見える関係で、経済的な価値だけではない、人と人とのつながりが増えた」と実感を語る。若者から高齢者まで、本業・副業・地域活動が自然に混ざり合い、子育ても介護も支え合う岐阜市独自の経済と文化の循環が、人々の暮らしを豊かにしている。

特集　稲わらが生む岐阜の循環

ぎふ長良川の鵜飼を支えてきた鵜匠装束。その製作に用いられる藁細工の技術が、いま新たな形で地域に息づいている。装束作りで培われた技を応用し、稲わらを素材としたバッグやインテリア、建築用パネルなどが制作され、暮らしの中に取り入れられている。この取組みは、「岐阜経済圏」を体現する事例といえる。原料の稲わらは市内農家から安定的に供給され、従来廃棄されていた資源が新たな価値に転換された。地域産業が稲わらを提供し、職人たちが技術と創造性を加え、完成した製品が地域内で流通・消費される岐阜ならではの循環が生まれている。製作の現場では、高齢職人の手仕事と若手デザイナーの発想が融合し、世代を超えた協働も進んでいる。

岐阜未来新聞
2040年0月00日（某）
産業・労働・交流
編集者：ユミジー、ふじいかぜ、おおつかゆうへい、小林但広、アキパンダ、安藤

食から広がる岐阜の価値
生産者の想いや地域資源を活かした食文化が産業として進化。（3面）

若い世代が未来を描く
「出ていく場所」から「戻り、選ばれる場所」へ。住宅取得、起業、子育てを見通せる環境が、若い世代の定住と関係人口の拡大につながっている。（3面）

行政と民間が対等に走る共創モデル
役割分担と信頼関係が、新しい公共を形づくっている。（4面）

「マルチワーク」がキーワードとなっている点が興味深いです。不確かなスタートアップでも自信を持って挑戦できるよう、しっかりとした支援の受け皿が整備されている社会像が描かれていると感じました。

岐阜市未来共創WS:Hグループ

変わり続ける岐阜市の”イマ”をお届け！ !Vol.24

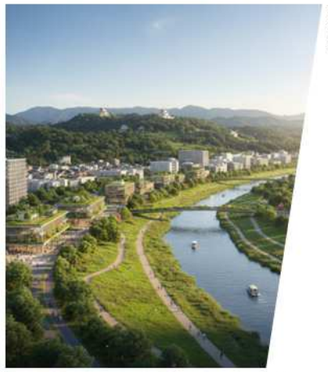
FUTURE NEWS

編集者
三品、大東、合木
市橋、梅田、中村

2040 JANUARY 1

THREEPERSPECTIVES

中心市街地の魅力アップ



魅力的な自然

暮らしやすい文化

心満たされる岐阜市へ！

「尖った岐阜」世界が注目 観光客・住民共に10年連続増

岐阜市が2025年から展開してきた「尖ったブランディング」戦略が結実し、住民満足度が向上している。地域の自然や文化を生かした体験学習プログラムが導入され、子どもたちが地元に愛着を持ちながら学べる環境が整っている。また、岐阜市は医療分野においても最先端の技術を取り入れ、遠隔医療サービスを拡充。AIを活用した診断支援やテレメディスンによるフォローアップが定着し、高齢者や地域住民の健康維持に貢献している。

市の広報課長は「ストーリー性のある一体的な情報発信に転換したことで、住民の満足度も高まった」と説明。SNSでの岐阜市関連投稿は年間500万件に上り、「岐阜市に住んでいると、自然や文化を身近に感じられてとても幸せ」といった住民の声が多く寄せられ、地域の魅力と住民の満足度が高まる中で、新たなブランディングが成功を収めている。

官民連携で中心市街地に若者の新店舗続々開業

岐阜市は、2025年からスタートした官民連携によるイベントの成功により、中心市街地に若者が続々と新店舗を開業している。この施策は、金華橋通りから柳ヶ瀬にかけて行われる毎週末のイベントを通じて、地域の賑わいを創出している。初めは30店舗からスタートした出店者数は、現在150店舗にまで拡大した。

毎週末、県内外から平均2万人が訪れるこのイベントは、若手起業家にとって重要なビジネスチャンスとなっており、新たな店舗が次々と開業している。これにより、家族連れが一日過ごせる魅力的なスポットとして定着している。市内在住の山田さん（35）は、「子どもたちがおじいちゃんおばあちゃんと一緒に楽しめる場所ができた」と語り、地域のコミュニティの再生を実感している。

若者の起業支援と地域活性化を目指す官民一体の取り組みが、岐阜市の中心市街地に新たな未来を切り拓いている。

サウナ×BBQ文化が定着 河川敷が市民の憩いの場に変身

長良川河川敷に整備されたリバーサイドパークが開設5年で年間利用者50万人を達成し、新たな岐阜文化として定着している。サウナ施設とBBQエリア、グランピングサイトを一体的に配置した画期的な取り組みで、金華山を望む絶景とともに四季を通じて楽しめる空間を実現した。パーク内のサウナ施設「長良川ロウリュウ」は連日満員状態。利用者の7割が市外からの来訪者で、経済効果は年間30億円に上る。併設するBBQエリアでは岐阜県産食材を使った地産地消メニューが人気を博している。常連利用者の鈴木さん（42）は「サウナの後のBBQ最高！子どもたちも自然の中で伸び伸び遊べるし、家族の週末の定番になった」と満足そうに語る。金華山山頂には新たに展望カフェも開設され、山と川を結ぶ一大レジャーゾーンが完成している。

最先端技術が日常生活に溶け込んだモデル都市

2025年に全国初の完全自動運転特区に指定された岐阜市。市内全域に配備された自動運転バス・タクシーの利用者数は月間100万人を超え、高齢者の外出頻度が特区指定前の3倍に増加した。ライドシェアシステム「ギフシェア」は24時間365日運行し、郊外住宅地から中心市街地まで平均待ち時間3分での迅速な移動を実現。医療機関への通院や買い物支援など、生活に密着したサービスとして市民に浸透している。農業分野でも自動運転トラクターやドローンによる精密農業が普及し、生産効率が40%向上した。市内在住の農家・松本さん（59）は「技術の力で労働負担が軽減され、若い世代も農業に参入しやすくなった」と評価する。最先端技術が日常生活に溶け込んだモデル都市として、全国から視察が相次いでいる。

信長公の夢を現代に 岐阜城山城完全復元

織田信長・斎藤道三時代の山城を完全復元した「岐阜城山城プロジェクト」が完成から3年で累計入城者200万人を突破した。発掘調査に基づく忠実な復元と最新のVR技術を組み合わせ、戦国時代の生活を体験できる施設として国内外から注目を集めている。長良川を活用した水上交通網も整備され、川港から山城まで戦国時代さながらのルートで訪れることが可能。電動アシスト登山道や山頂カフェなど、バリアフリーにも配慮した施設設計により、幅広い年齢層の来訪を実現している。

山城ボランティアガイド　加藤さん（35）

子ども達が目を輝かせながら戦国の歴史に触れる姿を見ると、地域の誇りを次世代に継承できていると実感します。

城下町エリアでは戦国グルメや忍者体験も楽しめ、岐阜市の新たなシンボルとして定着していますね。

岐阜市が創る教育と医療の共演

自然×最先端教育で全国トップクラス

岐阜市の独自の教育システムは全国的に注目を集めており、全国から小中高等学校への入学希望者が殺到している。この取り組みの一環として「岐阜自然科学アカデミー」が金華山麓に位置し、自然環境を最大限に活用した体験型教育を特色としている。

医療分野では、「岐阜先端医療センター」が再生医療とAI診断の最前線を担う研究拠点として機能しており、地域住民に最先端の医療を提供している。また、高校生に最新医療技術を体験させることで、将来の医療人材育成にも大きく寄与している。

同校出身で岐阜大学医学部2年生の伊藤さん（19）は、「金華山での野外実習と最新の研究設備を経験できたことで、将来への視野が広がった」と振り返っている。「最先端の教育と医療と言えば岐阜市」と話す保護者の声は、教育都市としてのブランド確立を示している。

河川敷の活用が非常に魅力的です。見た目の美しさだけでなく、本質的に IT やテクノロジーが組み込まれ、自動運転も実現している点が素晴らしいと思います。医療・教育・環境が融合することで、単に治療を受けるだけでなく予防医療のような新しい取り組みも可能になっています。

2040年4月10日発行　　岐阜市未来共創WS:Iグループ

ぎふみらいだより

温故知新で寛容性のある居心地がいいまち

世代を超えた「つなげるキーマン」が地域の架け橋に
高齢者と若者の協働で、地域活動参画率84%を達成

15年前から始まった「老若男女つながりプロジェクト」により、岐阜市の地域活動参画率は84%に到達。「地域活動に積極的な若者、高齢者」育成プログラムで342名の「世話やき隊」が活動し、多世代での活動団体は127グループを数える。「世代間ギャップなんて関係ない。みんなで岐阜を良くしたい」と世話やき隊の佐々木さん(74)。「高齢者の経験と若者のデジタル技術が組み合わさって想像以上の成果が生まれる」と大学生の田村さん(22)。
違いを認め合い、挑戦を後押しする文化が定着した。

公民館サードプレイス化で「偶然の出会い」が日常に

滞在性向上により1館平均月1,200人が利用、新事業58件誕生

市内19館が出会いの場にアップデートし、月間延べ利用者数は6万人超。カフェやコワーキング機能で朝7時から夜9時まで人が集う。「公民館で毎朝コーヒーを飲んでいたら、新しいビジネスパートナーに出会えた」と元会社員の山口さん(38)。「学校帰りに公民館によっていつも会うよしえばぁばに編み物教わってます」と小学4年生の香澄ちゃん(10)。
平均滞在時間3.2時間、偶然の出会いから生まれた地域事業は累計58件に達した。

まち全体が学校に！「みらまも教育」で地域愛98%達成

まちの先生制度により、次世代がやりたいことを実現

全小中学校で実施する「みらいをまもる教育」の満足度は98%を達成。まちの「みらまも先生」892名が年間1,450コマを担当し、古い資源の収益化実践例も教材化。第一世代が地域で活躍している。
「小さいころから、みらまも教育があったからやりたいことができた！」と起業家の鈴木さん(29)。成功事例47件が見える化され、女性の社会復帰率も89%に向上。「まちの人から学んだ郷土愛が今の仕事の原動力」と田中さん(26)。

規制緩和で市民活動が活性化

公共空間活用申請が短縮、年間イベント数5倍増

公共空間活用手続きを簡略化し、年間承認件数2,347件を達成。官民連携で市民のアイデアが実現しやすくなる！まちの市民プール、駅前広場、駐車場、公園などで、音楽祭やマルシェなど多様な活動が展開され、年間経済効果4.2億円。「以前は諦めていたアイデアも気軽に実現できる」とNPO代表の加藤さん。市民の創意工夫が公共空間に新価値を生み、文化度高いまちとして全国注目を集めている。

編集者：鬼ヶ島、ほりえもん、カハラ、りょうさ、黒ちゃん、大ちゃん

豊かなコミュニティの構築過程が報道されている点が印象的です。特に公民館のリニューアルを完全にやり遂げるという発想は、実現が難しい課題ですが、これを切り口にした未来像は非常に興味深いと思いました。

編集者：河原、所、丹羽、水崎、長屋　　岐阜市未来共創WS：Jグループ

GIFU FUTURE TIMES 2040

2040 4月

暮らしたいまち No.1 岐阜市

2025年、私たちは未来の岐阜市において「多様な交通手段の共存」「気候を問わない快適な環境」「大人が楽しそうに働く姿」を求めた。それから15年が経ち、移動の不便さや都心での快適な過ごし方が、市民、企業、行政の「共創」により劇的に進化を遂げた。
中心市街地は広大な歩行者天国となり、移動そのものがエンターテイメントになった。目的地での時間がさらに豊かになり、街全体がエネルギーを生む発電所のようにも機能し、誰もが主役となる2040年の岐阜市の現状をレポートする。

巨大な歩行者天国プロジェクト

中心部への車両乗入禁止とバス無料化により、街は「巨大な歩行者天国」へと生まれ変わった。かつての車道は自転車・歩行者レーンとなり、頭上を物流ドローンが飛び交う。エリア内は韓国街やスタジアムなどにゾーニングされ、移動そのものが楽しみに進化した。「街が賑やかになって本当に楽しい。遊べる街になって良かった」と佐藤健二さん（45）は語る。効率と回遊性が融合したこの空間は、まさに車のない楽園だ。

エネルギーの地産地消プロジェクト

緑溢れる街並みは、実は巨大なエネルギー拠点だ。自然エネルギー活用とスタートアップへの実証実験支援が結実し、建物には「発電する壁」による壁面緑化、歩道には歩行振動で電気を生む「圧電床」が導入された。太陽光発電と緑化の統合は、気候を問わず快適な屋外環境を作り出している。
かつて独り身で寂しさを感じていた田中よし子さん（78）は、圧電床の上を歩きながら「私の散歩が街の電気になる。公園に来ることが毎日の生きがいになったわ」と語る。市民の健康づくりとエネルギー生産が直結したこのシステムは、緑地化と共に住民の心も豊かに照らしている。

田中 よし子さん

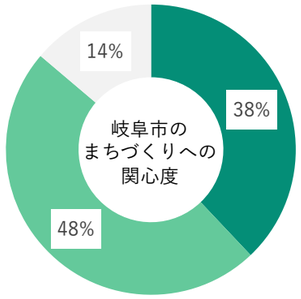
ぎふ「街ごとコワーキング」化計画

かつてシャッターが目立った空き店舗や空きビルは、今や「路地裏オフィス」や誘致企業のサテライト拠点として再生した。特筆すべきは、保育園・病院・介護施設がそれらのすぐ近くに整備されたことだ。職住近接ならぬ「職・育・医」の超近接が、働く世代の負担を劇的に軽減している。
路地裏のオフィスで働く鈴木麻衣さん（30）は、「生き生きとして働いている姿を子どもに常に見せられるのが嬉しい」と語る。大人が楽しそうに働き、子どもがそれを見て育つ。街全体が巨大なコワーキングスペースとなった岐阜市では、世代を超えた交流から新しい価値が生まれ続けている。

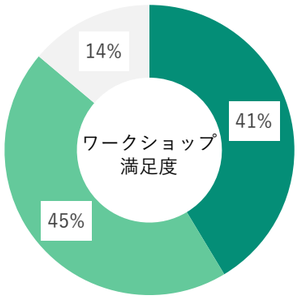
鈴木 麻衣さん

街の構造が完全に変革されている点が印象的です。特に「道路は車が走る場所ではない」という発想が斬新です。素晴らしい未来の実現を効果的に伝えていただきました。

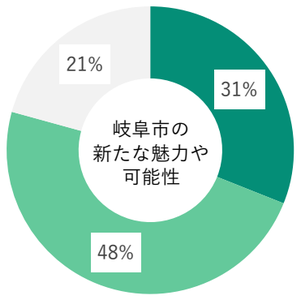
アンケート結果 (n=29)



- とても高くなった
- 高くなった
- 変わらない
- 低くなった
- とても低くなった



- とても満足
- 満足
- どちらともいえない
- やや不満
- 不満



- たくさん発見できた
- 発見できた
- どちらともいえない
- あまり発見できなかった
- 発見できなかった

参加者の声

多世代交流・多様性の価値

様々な年代・様々な職種の方が集まって、自分にはない考えに触れることができたことがよかったです。まちづくりの奥深さや楽しさ、難しさを学ぶ貴重な機会となりました。(20〜29 歳)

さまざまな会社・団体の方と多世代交流ができ、岐阜を住みよいまちにするための意見交換ができたことは非常に刺激になった。岐阜の人、まちについてこんなにも前向きに想っている人がたくさんいるのだと気づけ、貴重な機会になった。(20〜29 歳)

まちづくりへの理解深化

様々な立場、年代の意見や課題意識が聞けたことで岐阜市に対しての理解が深まった。(40〜49 歳)

働き方改革の進展により、働きながらまちづくりに関わることが現実的になってきていることを改めて実感しました。多様な世代や立場の人が関われるまちづくりの必要性を学ぶ、有意義な時間となりました。(30〜39 歳)

市民の皆様とともに

3 ヶ月間にわたる岐阜市未来共創ワークショップは、多くの市民の皆様のご参加により、実りある対話と創造の場となりました。この場で生まれたアイデアや議論は、これからの岐阜市の未来を形作る貴重な種となるでしょう。

私たちが目指す 2040 年の社会は、人口減少という大きな転換点を迎えています。この変化に対応するため、これからは、今まで以上に市民の皆様お一人おひとりが主役となる時代がやってきます。そのとき行政に求められる役割は、指示や主導ではなく、皆様の想いや行動に寄り添い、共に歩む「伴走者」となることではないでしょうか。

本報告書を通じて、ワークショップの熱気と創造性を少しでもお伝えできれば幸いです。しかし、これで終わりではありません。持続可能な岐阜市の実現に向けてこれからも市民の皆様とともに未来を描き、形にしていく協働の旅を続けていきたいと願っています。

皆様の想いと行動が、私たちのまちを動かす原動力です。ワクワクするような未来の岐阜市を、共に創っていきましょう。

SDGs 未来都市 岐阜市

岐阜市企画部未来創造研究室

Thank you for participation !

市民と共に創る、岐阜市の未来

2026 年 3 月

岐阜市企画部未来創造研究室